

# 日本獣医師会学会学術誌投稿の手引き

(平成26年4月1日 日本獣医師会)

## 1 目 的

本手引きは、日本獣医師会学会学術誌投稿規程（以下「投稿規程」）に則り投稿原稿の審査や編集が円滑に行われることを目的に、投稿規程に記載のない、一般的な事項、編集において必要な事項、著者が見落としやすい事項等を示したものである。

## 2 投稿資格及び条件関連

- (1) 筆頭著者は、日本獣医師会構成獣医師若しくは賛助会員（個人に限る）でなければならない。それ以外の者が筆頭著者の場合は、投稿料を徴収する（投稿時審査料10,000円、採用時掲載料50,000円を納入する）。ただし、編集委員会が認めた者については、この限りでない。
- (2) 発表者は、原則として8名以内とし、研究材料提供等については、謝辞で記載する。
- (3) 投稿原稿は、獣医学が扱う臨床、動物衛生、食品衛生、環境衛生、人と動物の関係、獣医学教育、動物用医薬品・機器等を内容とする、獣医学術の振興・普及及び調査研究の推進に関する学術論文等を範囲とし、委員会において、掲載に相応しい学術分野を指定する。
- (4) 他の学会誌等に投稿中、若しくは発表した論文等は受け付けない。なお、口頭による発表はこの限りでない。

## 3 投稿要領関連

- (1) 投稿の際は、所要事項を記載し、著者全員の署名した投稿票を必ず添付する。
- (2) 投稿原稿は、4部を提出する。
- (3) 原稿は、A4判用紙を使用し、1頁（片面）を25字×24行の横書きで、明朝体を用いページを付す。
- (4) 原稿の枚数は、表題、和文要約、英文要約（SUMMARY）、本文、図（写真を含む）・表等すべてを含めた枚数で、投稿区分の規定枚数は、別表のとおりとする。
- (5) 特に図、表は、本文との兼合い（枚数、印刷時の大

【別表】掲載区分と投稿原稿の制限枚数及び刷り上り頁枚数

掲載区分	投稿原稿制限枚数 A4判ワープロ等 (25字×24行)	刷り上り頁数
総説	24枚	6頁以内
原著	20枚	5頁以内
短報	16枚	4頁以内
技術講座	16枚	4頁以内
資料	8枚	2頁以内

きさ)を十分考慮し、規定枚数内に納める。

- (6) 以上の事項を逸脱した原稿については、審査以前に再提出を依頼する。

## 4 執筆要領関連（原著及び短報）

### (1) 用 語：

ア 動植物名は、原則として漢字を使用する。ただし、一般的に使用されているものに限り（例：人、犬、猫、牛、豚、鶏、馬、羊等）、それ以外のものはカタカナで表示する。

イ 薬品名は、原則として一般名若しくは局方名を使用し、カタカナで記載する。また、機器名は原則として一般に使用される名称を和文で表示する。

ウ 本文中に一般名等で記載した薬品、機器等の商品（製品）名及び社名等は、一般名称の直後に括弧内で記載することができる（商品（製品）名、社名、都道府県名の順／例：ニチジュウワクチン、日獣製薬株、東京）。

### (2) 表紙（第1頁）：

ア 最上段左側に部門名、希望投稿区分及び「新規」（新規投稿原稿の場合）あるいは「継続」（継続審査原稿の場合）の表示を赤字で明記する。

イ 次いで、表題、著者名、所属機関名（大学は学部名、都道府県勤務は支所名（本所は部名）、までとし、「〇〇動物病院」⇒「〇〇県 開業」（県名は所属獣医師会または所在地名）、「株式会社」⇒「株」、「社団法人」⇒「社」、「財団法人」⇒「財」、「独立行政法人」⇒「独」とする。）及び所在地住所（郵便番号を含む。併せて、実際の動物病院名も記す。）を和文で記載する。

ウ 表題は原則として副題、括弧、略号、「～について」、「～に関して」等は付けない。

エ 最下段には連絡責任者の所属（大学は教室名、都道府県勤務は係名まで、動物病院等は、実際の名称を記載）、住所、電話番号（ファックス番号）、メールアドレスを記入し、別刷を希望する場合には必要部数を赤字で明記する。

オ 表題が28字を超える場合には、28字以内の柱（ランニングヘッド）を記入する。

### (3) 和文要約（第2頁）：

字数は360字以内とし、要約の最下段には、原著では5語以内、短報では3語以内の日本語のキーワードを英文のKey wordsに対応する順で記載する。

### (4) 英文SUMMARY（第3頁）：

ア 英文の表題、著者名、著者の所属機関名、所在地住

所（郵便番号を含む）、SUMMARY及びKey wordsを記載する。

イ SUMMARYは、250語以内とし、行間を広く空けて記載する。

ウ SUMMARYはなるべく和文要約に対応した記載にする。

エ Key wordsは、SUMMARYの最下段にABC順で記載する。

#### (5) 本文（第4頁以降）：

ア 原則として、①緒言（見出しは付けない）、②材料及び方法、③成績、④考察、⑤引用文献の項目に区分して記述し、数字を用いて項目分けしない。（ただし、短報では必ずしも、この区分で記述する必要はない）。

イ 実験動物等の取り扱いについては、所属研究機関の動物実験ガイドライン（指針）に沿って動物に苦痛を与えないように実験を行った（または動物実験委員会の許可を得て実験を行った）旨を明記した上で、動物の苦痛を和らげる方法について具体的に記述し、当該動物を使用して実験を行う必要性と意義を説明し、併せて動物の入手方法と飼育状況を具体的に記載する。

ウ 図（写真）・表

(ア) 図（イラストレーションを含む）は、黒インクでA4版の白紙または青色方眼紙を用いて、表題を付け、原図から直接製版できるものとする。

(イ) 表は、縦罫線を入れない。

(ウ) 写真は、白黒でコントラストの明瞭なもの（カラーの際はモノクロ印刷でも明瞭なもの）とし、表題と簡単な説明を付け、原寸印刷が可能ないように必要部分を横7.8cm、縦6.0cmまたは横15.5cm、縦10.0cmに整形して台紙に貼付する（全体を糊付けするのではなく、コーナーのみを糊付けする）。なお、デジタル画像を用いる際は、明瞭な印刷ができるように光沢紙等の専用紙を用いる。

(エ) 写真には図と同様に一連の番号を付け、初回投稿時には4部すべての原稿にオリジナルを添付する。

(オ) 図及び表は、1点を1枚の台紙に貼付し（デジタル画像で光沢紙等を用いる際も同様）、写真とともに原稿の最後にまとめて添付する。さらに、それらの挿入位置を本文の右欄外に赤字で明記する。

エ 引用文献

(ア) 研究に密接に関係のあるものを引用する。引用できる文献は、学会誌、専門的学術誌あるいは専門書とし、学会抄録、講演会テキスト、レフリー制度のない商業雑誌等は原則として引用できない。

(イ) 本文中では、著者名の直後等、引用箇所に [1, 2-5] のように記載する。

(ウ) 文末に、本文中最初に引用された順に配列した引用文献リストをおく。①雑誌の場合は、著者名（全員列記）、論文のタイトル名、誌名、巻、頁（1箇所のみ）、年次（カッコ書き）とする。②電子ジャーナルの場合は、著者名（全員列記）、論文のタイトル名、誌名、巻、頁（1箇所のみ）、年次、媒体、入手先（URLをカッコ書き）、入手日（「参照」として、年月日を記載）とする。③単行本の場合は、著者（著者が複数の場合は、引用した著者のみ）、記事のタイトル名、書籍名、訳者名（1名のみ記載し、その他は和文では「他」、英文では「et al」とする）、編者名、版、頁、発行者、発行地、年次（カッコ書き）とする。ただし、著者名がない際は、編者がいる際は編者名を、その他は、学会、研究会等の名称を記載する。

(エ) 和文誌名は原則として省略しない。ただし、慣例的に使用されているものはこの限りではない（例：日獣会誌、日獣誌など）。

(オ) 欧文誌名の省略は、Journal Title Abbreviationsによる。指定のないものは省略しない。

#### 【雑誌の場合】

- [1] 青山太郎, 青山花子, 赤坂次郎: 子牛の開放性骨折の1例, 日獣会誌, 45, 115-120 (1992)
- [2] 青山太郎, 青山花子, 江戸三郎, 東京 愛: 犬のレプトスピラ症の抗原検出法, 日獣誌, 30, 135-138 (1992)
- [3] Aoyama T, Aoyama H: The welfare of animals, Jpn J Vet Sci, 54, 120-124 (1989)
- [4] Aoyama T, Aoyama H, Kanda J: A survey of heavy-metal contamination in imported seafood, J Vet Med Sci, 54, 126-130 (1992)
- [5] Aoyama T, Aoyama H, Suzuki K, Tanaka S, Takahashi Y: Pathogenicity of the aino virus in japan, Am J Vet Res, 53, 155-160 (1992)

#### 【電子ジャーナルの場合】

- [1] 永田四朗: 犬ブルセラ症の検出法, 家庭動物の感染学会誌, 25, 55-65 (2010). (オンライン), (<http://www.petzoonosis/article/25/1/1/pdf/s>), (参照 2013-04-20)
- [2] Williams A: Superinfection of bovine leukemia virus genotypes in Africa, cattle doctor, 50, 215-220 (2012), (online), (<http://www.cattledoctor/lin/15/12/20/pdf/>), (accessed 2013-05-05)

#### 【単行本の場合】

- [1] 神田一郎: マイコプラズマ, 獣医微生物学, 江戸三郎編, 第1版, 100-103, 青山堂出版, 東京 (1992)
- [2] Smith J: マイコトキシン中毒, 選択毒性, 赤坂次郎訳, 250, 学会出版センター, 東京 (1989)
- [3] Roitt IM: Immunophoresis, Immunology, Fred OG, et al eds, 2nd ed, 150-160, Grower Med Publ, London (1989)